爆破予告 *Mord pa*
31 (1965) ペール・ヴァールー(高見浩訳)
角川書店(文庫) (19
／30刊・¥340)

ペール・ヴァールーは、〝マルティン・ベック〟で著名なオシドリ作家の旦那の方。本書は、マイ・シューヴァルとの合作以前に書かれたものだ。

西欧のとある国、その国の出版界を全て牛耳る大出版社に、爆破を予告する脅迫状がとどく。捜査を命じられたイェンセンは、容疑者を一人一人追っていくが、そのうち、出版社やこの社会自体の持つ（こっけいで恐ろしい）一面を知るようになる。不快さ、不平等さを文字から一掃した社会の意味とは何か。作者の主張は、むしろそこにあって、犯人捜しにはない。

アンチユートピア物には、特有の臭いがある。結局本書にもその臭いはあって、ミステリと無関係の部分が、主要部を占めているようだ。その辺をどう捕えるかで、読み手の感想も違ってくるだろう。とにかく、アンチユートピア社会の持つけだるさ、無力感というやつは、作者が誰であれ、妙にまといついて気になる。しかも、良質の作品ほど、社会は最後までゆるぎなく、動じない。確かにそうなるのかもしれないけれど、別のアプローチは、もうないのだろうか。（後）